

# 朝鮮

## 私の労苦半生

千葉県 黒川 日出松

私の父は、千葉県の片田舎の貧乏農家の四男として、明治二十二（一八八九）年に生まれて以来、成人するまでそこから一步も他所に出ることなく過ごしていた。長じて同じ村に住んでいた幼友たちの女性と結婚した。それが母である。

当時としては珍しく兩人は恋愛結婚であった。親の目を盗んでは、水汲み場の片隅とか、近所にある村社の裏手とかで逢瀬を楽しんでいたという。村でもだんだんと評判になっていたらしいが、両方の親は結婚を

反対していたそうだ。特に、母の方の両親は絶対反対ということらしく、最後まで結婚は許されなかった。理由は良く知らないが、一緒に住むようになっても籍は入れられなかったそうだ。

そんな環境、境遇のもとに生まれたのが、私たち兄妹である。兄と私と妹の三人であったが、私が物心つくまで親子五人の水入らずの家庭生活は記憶になかった。私が生まれた翌年に、父は、この片田舎の貧乏百姓の四男ではどうしても生活をしていくことができないということから、朝鮮総督府の警察官に応募して幸いに採用されて、朝鮮北部の国境警備を命ぜられ、一人で新義州<sup>シンギョウジュ</sup>に赴任してしまった。今でいう単身赴任ということであろう。

私たち兄妹は、母を中心にして生活をしていたが、

昭和八（一九三三）年、私が小学校三年生の時に母はふとしたことから床につき、看病の甲斐もなく急逝してしまった。当時、まだ小さかった兄妹だけでは生活することもできないので、今後のことを相談するため父が帰国した。父の兄弟や、母方の親せきたちがいろいろと話し合った結果、兄と妹は父に連れられて新義州に行くことになり、私だけはどうか、母の実家に世話になることとなった。

私は、当時からあまり人の言うことを聞かない子供だったらしく、親せきの者からも「悪がき」と言われており、「悪いことばかりしていると親爺（警察官の父親を指していたようである）に縛られて、遠いところとに連れていかれるぞ！」と、脅かされて家に帰ることもならず、友だちの家を泊まり歩いていたりしていた。そんなようなことで嫌われ者で通っていた。

昭和十一年十月に父は、朝鮮で結婚した二度目の母と、生まれたばかりの女の子を連れて帰ってきた。私を迎えに来たのだったが、私はその当時、祖父（亡母の父）と二人だけで生活をしており、性格も小さいと

きとは異なっておとなしくなっていた。祖父と別れることは、辛い気持ちであったが、温かい家庭の愛情にも飢えていたので、素直に話を聞いた。継母の印象も悪くなかったので、朝鮮に行く決心をした。祖父との別れが悲しかったことを今でもよく覚えている。

新義州に着いてすぐに、新義州公立小学校の六年生に転入した。そこでやっと家族を囲んでの平和で落ち着き、家庭らしい生活を味わうことができた。

昭和十二年三月卒業し、当時の花形の勤め先であった満鉄の大連<sup>ダイレン</sup>鉄道工場付属技術員養成所を受験し、幸いに合格して、四月には第二十八期の養成員として入所した。養成員は全員寮に入って生活することとなっていたので、短い家庭生活に別れを告げて入寮した。

それから昭和十四年三月までの二年間、鉄道技術者として必要な学識、技術などを学び無事に卒業した。卒業と同時に養成員は、全満鉄の機関区、検車区および鉄道工場に配属させられたが、私は大連工場勤務となり、昭和十八年一月の入営まで大連で生活するようになった。

そのころ父は、それまでの新義州勤務から満州国の遼寧省安東に転勤になり、家族は安東市街に移っていた。継母は美容師としての技術を持っていたので安東に移ってから、市内の目抜き通りにある安東劇場の左隣に、丁字屋という美容室を開業して忙しく働いていた。兄は勤務先の関係で奉天（瀋陽）に移っており、私は大連と、家族バラバラの生活となっていた。

大連から安東までは一日では往復できないので、連休でもなければ帰ることはなく一年に一、二回ぐらいしか帰らなかった。それも最初の二年間ぐらいで、その後は友達もできていろいろな遊び場所も知り、そのうえ汽車賃もただだったので、安東に帰るよりあちらこちらを歩く方が楽しかった。旅順リョウシュンに行つては、二〇三高地、金州城、水師營など日露戦争の戦跡巡りや、仕事にも関係のある撫順フジュン炭鉱などの見学に精を出していた。

たまに安東に帰っても、正月、お盆、祭礼などの時の連休であったが、普通の家庭でないので、美容室は仕事が忙しく、家族とゆつくり話し合うこともできず

に落ち着かなかつた。

しかし、その反面、昼は普通の家庭の婦女子、夕方になると市内の芸者などが集まり、華やかな色っぽい雰囲気に浸ることができて楽しいこともあった。

特に、暮れや正月は、美容室が花街三番通りにあつたので、花月、いろは、東雲楼などの芸者置屋の綺麗どころの姉さんが、足繁く店に通つてきて待合室に入りきれない人たちが、私たち家族のいる居間にまでどんどん入り込んで、部屋中、脂粉の香りもむせ返るようだった。商売気を離ればやはり普通の若い娘であり、遠く親元を離れてきているだけに、家庭的な雰囲気を求めているのだろうと、今思うとその気持ちがよく分かるような気がする。

昭和十八年の大晦日のこと、入営のために大連工場を休職になって家に帰っていた私の寝間に、当時、売れっ子の中の売れっ子であった胡蝶という芸者が、忘年会のひと座敷を済ませてから髪を結いきたが、酒が入っていた勢いもあって、居間に上がり込み私の布団に入ってきた。彼女も家を離れて安東で生活をして

おり、かねがね家庭的に恵まれていないことも話に聞いていたのだが、その寂しさを紛らわそうとしたのか、うとうととしていた私を見て、笑顔で入ってきたのだった。私も日ごろから彼女を憎からず思っていたし、案外心の隅では次に起こるべき行為を期待していたかも知れなかったが、親や姉たちのいる家の中で、しかも彼女の朋輩もたくさんいる場所、とてもではないがそんな気持ちにはなれず、逆に眠気も吹っ飛んで、みんなのいる部屋に逃げた。部屋に入ったら開口一番、「東雲楼の一番の姉さんに、可愛がってもらってよかったですよ」と言っただけで、皆が私をからかった。継母までが、「胡蝶姉さんと一緒に寝るなんて、お金なんかではできないよ」と言っただけで笑っていた。

入隊前には、そんな一時の青春があったが、これも今に思えば懐かしいことだ。

入隊後に知った話だが、既に両親は私の将来の伴侶という考えで、美佐子という継母の妹の子を内地から引き取って妹たちの世話をさせる傍ら、髪結の技術を教えていた。

私は、大連工場に勤務している間、地元の青年学校に入っていたが、青年学校は会社の仕事よりも軍事教育優先で、国防競技、射撃訓練、銃剣術など、満州一と言われるほどの激しい訓練が毎日あった。そのおかげで入隊してからの基本教練は楽であった。

昭和十八年一月十日、哈爾濱<sup>ハルビン</sup>鉄道第三連隊に入隊した。大連に住んでおり、しかも満鉄に勤めていた関係で鉄道兵となった。内地で入隊した同年兵は、基本教育のため千葉の鉄道第一連隊に入って、一期の教育を終えてから哈爾濱に移り第三連隊に合流した。五月には一期の訓練検閲が終わり全員が揃った。

その後、特業として機関手、通信、木工、発動機、写真、印刷、施盤、その他に分かれての教育となったが、鉄道兵にならない者は、本科兵として漕舟、架橋、測量、爆破、潜水、暗号など工兵の如き技術教育がなされた。

私は、製缶工技修得のために、満鉄の三裸樹鉄道工場に派遣された。牡丹江鉄道第四連隊の製缶組立班も、この工場に教育を受けており、同じ棟の壁を仕

切ただけの隊舎に入っていた。日夕点呼後、派手な音が度々聞こえるので何事かと思っていたが、翌朝、彼らに聞いてみると尻を革帯で叩かれたとのことだった。全く素晴らしい音が出るものと感心したものだ。た。

昭和十九年二月に、第二期の教育が終了し、続いて練成訓練となったが、私は入隊前からの、いわば本職であったので少しも苦にならず、毎日を楽しく過ごしていた。そんなときに、父から手紙が来たが、それは美佐子との祝言のことが書いてあった。「美佐子の父親も安東に来ているので、この機会に結婚式を挙げたいから、休暇を取って帰ってくるように」という内容だった。これには随分と悩んだ。手紙の内容を班長に報告しなければならなかった。班長は本属の鉄道連隊から来ている人でなく、材料廠から派遣された人だったので、あまりきついことは言わずに、「それはできないことだから、そのように断りの返事をすぐに出しなさい」と指導され、すぐに返事を出した。その後、家からはこの問題についての話はなかった。

昭和十九年三月には練成訓練も終了し、一度原隊に復帰し、そこから新編成の鉄道第十三連隊第五中隊に配属になった。鉄道連隊とはいうが、いろいろの兵科から成る混成部隊であった。三月下旬には哈爾濱を出発して北支戦線に向かった。

安東の家族とは会う機会もなく、慌ただしい出発であった。ついに美佐子とも会うことがなく終わってしまった。

中隊の任務は、黄河の南岸から信陽シンヤウの間における南部京漢線の鉄道建設作業と、その間の運転業務であった。現地はまだ、戦いの跡がそのままで荒廃して路盤構築とか線路の敷設などの作業ができずに、半月ほどは山に横穴を掘って蟄居生活を続けた。

穴の中には、サソリがいて何匹かが這い回っている。初めのうちは気になって眠ることもできなかったが、服を着るときとか、靴を履くときに注意すれば心配するほどのこともないことが分かり、いつしか慣れってしまった。

鉄道の建設が予定より遅れているので、前線に送る

物資が黄河北岸に野積みされており、この整理のために使役に駆り出されていた。しかし、帰りには、甘味品とか酒類などをごまかして持ち帰ったりしていた。そのうちに使役中に下調べをしておいて、夜半に二、三人の組になって夜襲をかけ強奪してくることもあった。

まだ、山を越した辺りでは戦闘が続いていて撃ち合いの音が聞こえていた。

しばらくしてやっと、路盤構築作業ができるようになった。昼間は作業に出て夜は天幕の中で寝るとい生活が続いていた。

ある夏の夜中のこと、突然に「敵襲！」という叫び声が耳に入った。それと同時に天幕内で、「グー！」「ギュー」といううめき声が出て、物を投げる音、蹴る音が続いた。一瞬のことで何が起きたのかも分からないままに、「敵襲！」という叫び声に外に飛び出した。前からこの付近には敵の斥候が出没しているから十分に注意するようには言われていたので、そのことが頭の中にこびりついており、やっと熟睡をしたところ

での叫び声なので、びっくりしてただ逃げることを考えてしまった。銃は常に頭の上に置いてあったが、とっさのことで銃を手にした者はいなかった。そのうちに何事もなく静かになった。暑さのため全員、ふんどし一つで寝ていたの、その様は全くみっともないものだった。

調べてみると、A軍曹が酒に酔って四つんばいになって自分の寝床に向かっていくときに、運悪く膝でH上等兵の首を押さえるようになっこうになってしまったことからこの騒ぎが始まったらしい。

敵の斥候が出没しているという情報がみんなの頭に深く残っていたので、夢うつつのH上等兵が、A軍曹を敵の斥候と思いきり思いいきり蹴飛ばして外に飛び出し、他の兵隊も何も分からずに驚き慌てて、飛び出すというパニック状態になったためだった。そんなことがあってからは、不寝番は天幕の近くに位置するようになった。

私の小隊長は、陸軍士官学校出身の上野少尉で大阪天王寺の人だった。性格は磊落らいらくでとても感じの良い人

で、兵隊仲間でも評判の良い人だった。士官学校を卒業して間もないのに胆もすわっていた。私は、三カ月間伝令の任務に就いていたが、二人だけになるとお互いざっくばらんな話をしていた。大阪出身なので、田舎出身の兵隊の話は珍しかったのだろう、よく一緒に話して話し合っていた。好漢惜しむらくは、後日、鐵路警備の作戦中に戦死した。二十一歳だった。遺体は戦地で茶毘に付して、遺骨は私たちの小隊員が佐世保まで持ち帰った。

その後、作業は黄河鉄橋や敷設した路線の修理、修復が主になった。橋の補修材と枕木は現地調達となり現地住民を徴用した。伐採作業のためのこぎりを持って集まるようにとっておいたが、息が切れるだけで、とてもではないが木は切れないような代物を持ってきた。自分たちで伐採作業をして、ノルマがあるという話を話したら、翌日からは二人挽きのよく切れるのこぎりを持ってきた。現金なものであった。

伐採した材料は、道なき道を山から現場までの最短距離をロープで引いて運ぶのだが、お互いに競争して

いたので、勇壮ではあるが、危険でもあるので中止させた。作業中に大雨が降り、せつかく集積した材料を半分近くも流され、かなり遠くまで捜しに行ったこともあったが、大半は拾い集めた。

以前、使用していたレールを、地中に埋めて隠してあったが、住民の情報と協力によりそれを取り戻して敷設したこともあったが、そのときは中隊長から、「勲殊甲」と言われた。その後、私は中隊本部の指揮班に移り、徴用の交渉役になった。報酬として小麦粉や岩塩を支給した。

勤務の合間には、本部班の者と一緒に現地住民の病気や怪我の治療を行った。軍医はいないので衛生兵が指導した。薬品もそうたくさんあるわけではないが、慰問袋に入っていた歯磨粉に小麦粉と正露丸四分の一ぐらいを入れて混ぜ合わせたものを、服薬として与えたが、これが面白いほど良く効いて大変喜ばれた。

こっちも嬉しくなっていた。腫れ物は、カミソリで切開して膿を押し出して、そこにヨーチンを塗ると三、四日で大体治ってしまい本人が喜んで礼を言いに来

た。この程度までの治療で、それ以上のことは衛生兵に任せていた。

戦争孤児というか、戦渦のために両親家族と別れ別れになった中国の子供が、私たち兵隊になつて、次郎た。時代物が好きな中隊長が名付け親になつて、次郎長とか、吉良の仁吉とか、大政、小政とかの名前を付けられて可愛がられていた。彼らも片言ながら現地住民との間に入って通訳をしたり、使い走りや雑仕事を一生懸命にして良く働いていた。この子たちのお陰で私の中国語も上達した。日本に行きたいとも言っていたが、本当に素直な明るい子供たちだった。作戦遂行のために移動することになり、一緒に連れていくことができずに別れてもらったが、こっちも辛かった。あの子供たちはあれからどうしたか、無事親を捜して帰っただろうかと心配になり、ときどき戦友と話し合うことがあった。一度会いたいと思つている。

昭和二十年四月からは、湘桂線の桂林ケウリンに駐屯して建設作業に従事していた。桂林に行くのに五十日ぐらいかかり、約千キロメートルを歩いたが、この行軍は苦

しかった。そのうえに制空権は完全に敵の手に握られていて、昼間は敵機からの攻撃を避けるために動くことができずに、夜間のみに行軍で心身共に疲れてしまった。眠りながら歩いたものだった。

桂林での作業が終わると江蘇省南京に移駐することとなったが、今度は私たちが修復した鉄道で移動したので楽だったが、やはり夜間行動であった。しかし、乗ったのは無蓋車だったので、敵に対する警戒は大変だった。夜間だったが、切り通しの所に差し掛かると上から機銃掃射を受けて数人が死傷した。

南京に到着し、中隊本部は郊外の棲霞山に位置し、私たちの小隊は円陽駅構内において、六月から海南線の上海・南京間の鉄道構築業務に任じた。そこで、機関車の待避壕を掘っていたときに落盤事故が起きて、日本軍兵士三人と現地作業員七人の犠牲者が出た。終戦十日前の痛ましい出来事だった。

八月十五日、終戦となり、続いて復員が下令された。

戦争が終わった途端に、安東に残っている父母や、

妹たちや、美佐子のことか心配になってしまった。すぐにも現地除隊をして安東に行こうと思つて準備をしていたが、その機会が見つからなかった。

その後、中隊は、中国陸軍總司令部工兵の指揮を受けて鉄道業務に引き続いて従事していた。

八月末頃だったと思うが、南京に中国軍が進駐して、我が軍の武器、弾薬、その他の軍需品全ての物資を引き渡し武装解除が行われた。たしか新四軍（共産八路軍）であつたと思う。一日遅れて今度は、国府軍（蔣介石軍）が到着して、中国軍同士の主導権争いが始まり一週間ぐらいで一応片づいたが、海南線沿線では八路軍のゲリラが出没し、列車の正常な運行はもろんのこと、鉄道業務全部が危険な状態となつた。国府軍は、やむを得ず我々に武器、弾薬を渡し、運転業務を続けるように指令してきた。

国府軍工兵隊の指揮下に入ったが、軍の組織はそのまま維持した。階級、給料、食糧、その他全ての前までの、一個分隊ぐらいで乗車勤務に就いていた。勤務以外の者は、捕虜扱いで収容所に入れられたが、毎

日、何もせずにトランプや、花札や、将棋の駒を作って遊んでいた。また、劇団を作って他の部隊へ慰問に出掛けていた。

私たちの中隊は、中隊長が時代物が好きだったので必然、時代劇を得意としていた。

収容されている時に、日本人が日本軍の服装のまま中隊本部に来て、盛んに八路軍に入るよう勧誘していた。入隊するならば、階級は二階級特進させるが、ただ給料は変わらないとか、中隊全員が今の編成のままならばさらに優遇するとかいろいろと言っていた。

中国生まれで中国育ちの人たちや、日本に帰るところや、身を寄せるあてのない人は、随分と動揺していた。私もその一人であつたが、今更、中国人同士のもめ事で命を落とすのは嫌だと思い、応ずる者は少なかった。私たちの中隊員は皆無事だった。収容所では十数人の現地除隊者が希望して、以前住んでいた所に向かつて行ったが、全員が目的地にまでは届かず、収容所に戻ってきた人も二、三人いた。しかしそのときには名簿から削除されていたので、復帰することもで

きず一般の邦人グループに紛れ込んでしまったようだ。私は、その人たちと一緒に行動しなくて良かったと、つくづく思ったものだった。

昭和二十一年三月に、中国国府軍工兵部隊の指揮を解かれて、上海に向かって出発した。このまま、この状態で、ここにおいておくと八路军と手を握るとも限らないので、早く日本に帰した方が得策という、国府軍の思惑があつてのことと思われた。

毎日、毎日、部隊単位での引揚げが行われていた。日本への引揚げが現実のこととなると、再び安東のことが心配になってきた。今、どうしているのだろうか、果たして全員日本に引き揚げているだろうか、それともまだ満州内をさまよっているのだろうか、病気は、怪我は、食べ物……と、心の負担が重くなってきた。いろいろな情報が飛び交う中で、一人で悩んでいた。いっそこから一人で安東まで捜しに行こうかと思うこともあったが、ここで中隊を離れてしまったらどうにもならないと思ひ返した。戦友からも言われて、中隊と行動を共にするという決心を固めた。

昭和二十一年三月二十一日、上海港より米軍のLS T型上陸用舟艇に乗船して長崎の佐世保港に着いた。四日間の航海だった。

佐世保港に上陸、手厚い歓迎を受けた。木々の芽が薄緑に萌え出ている様は中国ではまだ見られず、心にかさを与えてくれた。米軍の占領下にあつたとはいえ、日本人の手でなされたDDTの消毒も苦にならなかつた。

南風崎にて中隊は解散となった。各人は喜びに胸をふくらませてそれぞれの郷里に向かって去っていた。田舎出身の者は田畑があるので比較的に落ち着いていて、「帰るところがなければ、俺の所に来い」と言ってくれた。そして持ち帰った米を全部、私にくれた。千葉は全域焼け野原になっているだろうと言う話から親身になって心配してくれたのだった。戦友の有難みをつくづくと知つたものだった。

私は悩んでいた。千葉に帰っても、両親や、兄妹はどうなっているかも知れず、私を受け入れてくれるかどうか分からない。いっそ、大阪出身者が多かつた

戦友を頼って大阪に行って仕事を探すがよいのではないかと考えていた。その気持ちの中には、嫁になるべき美佐子のが頭の中にあつたのだ。美佐子も、その両親も、継母の両親も、和歌山の新宮市の近くにいたので、そこに顔を出して様子を聞こうと思ひ、先づ新宮に向かった。

両家共に、元気で生活をしており私を歓迎してくれた。そこで意外なことを知った。父は終戦前に何の事情があつたのかよく分からなかつたが、千葉に一時、帰ってきたそうだ。そして用事が終わって安東に帰ろうとしたが、戦争が激しくなり帰るに帰れずに、そのまま千葉に留まっているということであつた。

早速、私は千葉に帰ることにした。住んでいた宮野木は戦争の爪痕もなく昔のまま、父は十四歳も年上の兄の面倒を見ながら、百姓をしていた。

私は、早速に腰を据えて食べるが為に日雇労働者となつて働いた。それからは苦勞の連続だったが、何も考える暇も余裕もなく、家族が引き揚げてくるのを一日千秋の思いで待ちながら働いていた。

昭和二十一年十月、継母と、まだ小さい三人の妹は、安東から苦勞に苦勞を重ねて葫蘆島コトクに集結したが、そこで奉天から引き揚げてきた兄の一家と偶然に再会し、一緒に博多に上陸した。継母は足が悪く、その上に、十歳、七歳、四歳の子供を抱えての避難行で、口に出して言えない苦勞をしたらしく、千葉にたどり着いたときには随分衰弱していた。

私の嫁になるべき運命にあつた美佐子は、父のいない安東で、継母を助けて一家の柱となつて家事を切り盛りしていたが、敗戦後数日たったころに、八路軍に看護婦として強制的に徴用されて、吉林省の通化の病院で働かされていた。過酷な労働と、栄養も不十分な食事で、体をこわしてしまい、しばらく病院に入つて療養をしていた。継母が、引き揚げが決まつて一緒に帰国できるようにいろいろと頼んだが、何ともできずに一人置き去りとなつてしまった。看護婦仲間は数人いたようだったが、身よりのない異境の地で、病に伏していた美佐子の気持ちはいかばかりであつたらうか。昭和二十二年七月にととうと死んでしまったと後

日になって連絡があつた。当年二十三歳の若き乙女であつた。他国の地で、家族とも別れ、慣れない看護婦としての重労働に耐えて、一日でも早く日本に帰れることを期待していただろうに、かわいそうなことであつた。

昭和二十四年に遺骨が帰つてきた。美佐子の両親も、一応、嫁に出したつもりの娘なので、葬式はどちらに行うのがよいかと相談にきたが、私は、私の嫁として我が家の墓地に埋葬することを主張した。夫婦としての生活はしていないが、心は夫婦であつた。

私自身は、兵隊に行つており、しかも鉄道兵という後方で、軍務に服している立場にあつたので、多くの人々と異なりそんなに苦勞らしい苦勞はしていないし、引揚げも順調だったので、他の一般邦人の引揚者とは比べものにならなかつたが、家族は、それ相應の苦勞をして帰つてきた。

一緒に佐世保に引き揚げてきた戦友も、五十余年が過ぎると、八十人近い人がこの世を去つていった。召集兵が多かつたので年齢層も幅があつたから致し方な

いが、このままでは昔のことが忘れ去られると思ひ、一番思い出の深い海南線、棲霞山、上海などを是非、もう一度見ておきたいと思ひ、平成二年に旅に出掛けた。

特に棲霞山は、敗戦十日前に機関車の退避壕掘りの最中に、十人の犠牲者を出したところで、二度と犯したくない過去を心から反省し、悔しい思いを残した霊を慰めたいと、慰霊碑を建立することを考え準備をして行つたが、国情の相違は、私たちの考えるほど、単純なものではなかつた。

慰霊碑や、棲霞寺の任職による読経も許されなかつた。碑は墓標に変え、読経は日本の任職による録音放送となつた。

線香、ろうそく、供物も全部、日本で準備しなければならなかつた。慰霊祭のまねごともし、やめて欲しいということになつた。もしもこのことが中国上層部に知られると、任職はもちろん、関係者全員が公職を追放されることだつた。中国では、国民全員が公務員であつてその職を追放されれば、他の職を求めると

とはできなくなるということ、無理も言えずに諦めてしまった。

しかし、現地では温かい歓迎を受けた。住職も先頭に立って、案内説明をしてくれた。国情と人情の違いがはっきりと認識された。気持ちだけは、すがすがしい慰霊の誠を捧げることができた。

これで肩の荷が降りたような気持ちになった。日中友好を心から祈り、亡き人々の霊に別れを告げた。戦後生まれの人たちに、あの苦勞が真実として伝わることを祈念しながらこれを書いた。

### 三十八度線を越えて

#### 鎮南浦から引揚げ

神奈川県 二 司 哲 夫

#### 一 海外居住の経緯

国民学校五学年を終えた私と母は、単身赴任中の父に伴われて昭和十七（一九四二）年三月三十一日、関

釜連絡船興安丸に乗船して朝鮮に渡り、四月二日、朝鮮平安南道鎮南浦<sup>チンナムポ</sup>郊外の工場社宅に入居した。昭和十三年、父は信越化学工業直江津工場で、航空機製造に不可欠な金属マグネシウムの製造に関する技術開発に成功し、軍の大量生産要請を受けて同社が設立した朝鮮重化学工業の取締役工場長として原料調達の容易な鎮南浦で昭和十六年五月から工場を建設中だった。

昭和十八年一月この工場は金属マグネシウム製造技術を持たなかった三菱に買収されて社名が三菱マグネシウム工業に変わり、父は取締役工場長として引き続きこの工場に勤務し、同時に三菱化成工業に参事として入社した。

昭和十八年四月一日、国民学校を卒業した私は、知人の勧めで関東州旅順市の官立旅順<sup>リョウシュン</sup>中学校に入学して寄宿舎から通学した。休暇の度に大連<sup>ダイレン</sup>、奉天<sup>ホウテン</sup>（瀋陽）、平壤を経由した片道三十時間を超える苦しい汽車の旅も、今では懐かしい思い出である。しかし、二学年になって体調を崩した私は昭和十九年七月二十日に休学し、同二十四日、鎮南浦の両親のもとに帰っ